



ハーレム ウェディング

Harem Wedding

小説 竹内けん 挿絵 神保詠蘭

二次元ドリーム文庫 / PDF立ち読み版

登場人物紹介

Characters



クラミシュ

ドモス王国の地方都市ヴィーグルの支配者の娘。父王ロレントの漁色家ぶりを知っているだけに、極度の男性不信になっている。



ティファーン

現ヴィーグルの支配者。名門貴族の貴婦人としての風格がある。おっとりした性格で、周りの者を包み込む。





ルキアナ

カルシドの腹心を務める魔法戦士。
カルシドが物心ついたころから彼に
仕えていた、忠誠心が豊かな娘。カル
シドに惚れている。



ドリーリア

日常生活でも戦闘時でも巧みにクラミシ
ュをサポートする女騎士。浅黒い肌に黒
のレザースーツをまとうブロンズ美人。

カルシド

ドモス王国の名家の次男坊で、武勇に
秀でた少年騎士。優れた才覚を見込ま
れ、ドモス国王の数いる王女の一人と
結婚し、その家を継ぐことに。

第一章	赤き宝石の瞳をした牝龍	007
第二章	迷宮への誘い	050
第三章	側女選び	090
第四章	暁の女神来襲	125
第五章	籠城戦	165
第六章	ヴィーヴル辺境伯	213

「あら、このくらい普通ですわよ」

「えっ！」

いまさらのように、そこにティファアヌがいることを思い出したカルシドは目を剥く。

「あらあら、有能な婚殿でも、やっぱり童貞ですね。女に性欲がないなどと思っておりますの？」

侮られたカルシドは対応に困った。

「あ、いや……そんなことは……」

赤面し、しどろもどろになったカルシドも、理屈としてはわかる。

ルキアナは成人した女性だ。性欲を発散させたくなるのは当然であろう。

しかし、それはもつともプライベートルームな姿だ。上司とはいえ、自分が見ていい姿ではない。

まして、彼女のオナペットは自分だったらしい。明日からどんな表情をして顔を合わせればいいのか。

深刻に考えるカルシドとは反対に、ティファアヌは軽く促した。

「あのような素敵な女性を虜にして、しかも放置するなんて、婚殿もなかなかマニアックですわね。早く抱いて差し上げたらいかげすの？」

「な、なにを言っているんですか、ぼくにはクラミッシュがっ!？」

血相を変えるカルシドを、ティファアヌは嗤う。

「うふふ、側室を幾人持とうが、そんなことで大事な婿殿を手放したりいたしませんわよ」
「いや、しかし、クラミシユは潔癖な方ですから……」

なんかティファアーヌが得体の知れない怪物に思えてきた。必死に抗言するカルシドに、ティファアーヌは声を上げて高笑いした。

「おほほ、あの娘が潔癖。ほんと婿殿は女の修業が足りませんわね」

「はあ……」

女の修業が足りないというよりも、まったくしてないというのが事実だ。返答のしようのないカルシドを、ティファアーヌはさらに矚る。

「クラミシユもあの女と同じですわ。外面は高潔でも、一皮剥けばただの牝。ついていらつしゃい。次はあの娘の正体を教えてあげますわ」

ティファアーヌが隠し通路を歩きだし、カルシドはその後ろを唯々諾々について行くしかない。

「……」

二人はなんとなく無言で歩いた。

狭い隠し通路。頼りの灯は、先に行くティファアーヌの翳す燭台の魔法光だけ。

宵闇の中に麗しい貴婦人の姿だけがぼっと浮き出ているのだ。なんとも妖しかった。

結び上げた後ろ髪を縦ロールから覗く白い項うなじが眩しい。それにカルシドの鼻腔を甘い香りが刺激する。

狭い回廊であるから、貴婦人の纏う香水が充滿しているのだ。

(ごくん)

女など一皮剥けばみんな同じ。そうティファーンは言ったが、その言葉はそのまま本人にも当てはまるのではあるまいか。

なにせ、この匂いたつ貴婦人は、国王ロレントの側室である。若いころは副都カーリングにある後宮で過ごしていたとはいえ、ヴィーヴル城主となつてからは、夫とはほとんどご無沙汰だろう。

もしかして、性的に餓えているかもしれない。そう考えると息苦しさは倍増する。

とめどない淫らな空想に誘われる、長いようで短い夢幻のような時間が流れて、目的地に到着した。

「さあ、着きましたわ。ここを覗いてくださいませ」

ティファーンは、先ほどと同じように魔法の指輪を差し込み、魔法の覗き穴を用意した。(いままでの話の流れからして、ここはクラミシユの部屋だよなあ)

他人のプライバシーを覗くのは悪いことだ。まして、あの気高いクラミシユである。覗かれたなどと知っては、決して許さなはずだ。

しかし、男として女性への好奇心は抑えかねるものがある。

(クラミシユ、ごめん！)

内心で謝りながらも、覗いた。

さすがは城主の一人娘の部屋である。豪華な装飾品で覆われていた。

しかし、華美ではない。質実剛健な雰囲気、いかにもクラミシユらしいと思う。

視線を彷徨さまよわせると、目的の人物は寝室にいた。まだ寝ておらず立っている。いや、もう一人いた。

その女に立ったまま抱きついている。

(あれは確かクラミシユの腹心で……ドリーリアといったか?)

クラミシユも女にしては背の高いほうだが、彼女のほうがさらに大きい。並の男より断然高く、それでいて、ムチのようにしなやかでパネの利いた身体つきだ。

銀色の長髪に彫り深い顔立ち。褐色の肌、身体にびったりとフィットした黒革のボデースーツを纏っている。その衣装は胸元が大きく開いているだけでなく、背中も大きく開き、尻の谷間が見えるほどだ。

このようなスタイルがまる晒しの衣装が似合う、スレンダーなのにグラマラスな体型をしている。

「っ!？」

次第に焦点が合ってきて、カルシドは目を剥いた。

クラミシユは背の高い女の首に両手を回して、伸び上がるようにして唇を重ねていたのだ。

「ん、んん……」

なんと二人は夢中になって接吻していたのだ。

クラミシュの相手が男であったならカルシドはショックを受けながらも、身を引くか、決闘騒ぎの一つでも起こすか、はたまた相手を人知れず抹殺するか、いろいろと思案したことだろう。しかし、相手が女ということで度肝を抜かれてしまい思考停止に陥ってしまった。

ややあつて呆然と傍らのティファーンに質問する。

「え、えーと、あ、あの……クラミシュ殿はその……レズ？」

「違いますわよ」

即座に否定した母親は、困ったものだと言いたげに溜息をつきながら解説した。

「あれは婚殿の腹心と同じ。オナニーですわ」

「オナニー？」

瞬きをするカルシドに、ティファーンは肩をすくめながら説明した。

「そう、うちのバカ娘に限らず、姫君というのはプライドが高いものですからね。自洗などまじりたしませんわ。でも、姫君だろうが、なんだろうが、年頃になれば性欲を持て余しますの。そこで侍女とか側近に処理させるのですわね。あの娘の場合は、ドリーリアというだけですわ。ですから、ご心配なさらず」

そういうものなのだろうか？ カルシドは返答に困る。

そうこうしているうちに、室内の女たちは接吻を止めた。

「ああ、ドリーリア。わたし今日、男に汚されてしまったの。早くおまえに浄化してもらいたい」

クラミシユの言動に、ドリーリアは困惑したように眉を顰める。

「そんなにカルシド殿がお嫌いですか？ 見た目もよろしいですし、なかなか誠実そうな方に見えましたか？」

「あいつ個人がどうこうではない。わたしは男が嫌いなのだ。男なんて、女を嗜好品としか思っていないんだ」

「そんなこともないと思いますが……」

疑義を呈する腹心の言葉に、クラミシユは激しく頭を振った。

「そうなのだ。わたしの父を見る。寵妃の数は一夜妻を合わせると千人を超え、わたしの異母兄弟姉妹は確認できるだけで百人以上だぞ」

「カルシド殿は違うかもしれませんが……」

「男なんてみんな同じだ。汚らわしい！」

頑なに拒否したクラミシユに、褐色美人は諦めの溜息をついた。

「まあ、仕方ないですね。そうだ、今夜は少し趣向を変えますか」

「趣向を変える？」

「こちらに」

ドリーリアは主君を伴って、カルシドの覗いているほうに歩いてきた。

(えっ、こっちに来る?)

驚いたカルシドは思わず逃げようとしたが、二人からこちらが見えるはずがない。ドリアが主君を伴ったのは鏡台の前だった。そこに備えつけられた椅子に、クラミシュを座らせる。

「どうやら覗き穴の役目を果たしている魔法宝珠は、鏡台の上に置かれているのだろう。カルシドが手を伸ばせば届くような位置だ。」

「な、なにをするのだ?」

「クラミシュさまは、男なんてみんな汚らわしいと拒否なさいますが、人間なんてみんなエッチなんです。そのことを教えてあげますよ」

クラミシュの耳元で囁きながら、ドリアは胸鎧を外し、青い戦装束の胸元をはだけた。

中から青いブラジャーに包まれた乳房があらわになる。そして、それをも外されてしまった。

ぶるんと活きのいい乳房が剥き出しになった。

(う、クラミシュのおっぱい……)

瘦身であるし、年齢的な制限であろう。それほど大きいとはいえない乳房だ。しかし、ツンと上を向いている肉丘は、綺麗に形よく整っていた。

頂きを飾るピンク色の乳首は、透明感があって美しい。しかし、乳房との比率から考え

ると小粒な気がする。

食い入るように見る男の前で、クラミシユを背後から抱き締めたドリーリアの両腕が、その乳房を優しく包む。

「ああ……」

ドリーリアは主君の耳元から首筋、鎖骨にかけてネッキングしながら、両手の指で主君の乳首を摘んで転がす。

すると乳首はみるみるうちに膨張していった。

「はあ……あああ……」

鏡に映る自らの痴態を見たクラミシユは羞恥心に震えながらも恍惚の吐息を漏らした。
(クラミシユがあんなエッチな顔をしている!?)

高潔で、怒りっぽくて、真面目な少女。幼いときからそう認識していた少女の初めて見せる表情に、カルシドは呆然として魅入るしかなかった。

「ああ、気持ちいい。ドリーリアの指って気持ちいいわ。わたし……わたしは、ドリーリアさえいてくれればそれでいい。男なんていらなない」

主君を存分に楽しませたドリーリアは、さらに両手を下半身に持っていった。青いミニスカートの中に、両手を入れると、青いショーツをするすると抜き取る。

そこらなんと、両脚を抱え上げてしまった。

「っ!？」

カルシドの目の前で、なにも知らない婚約者の少女がM字開脚になってしまった。ツヤツヤとした黒い陰毛が恥丘に繁茂していたが、絶対量が少ないらしく、肉裂が丸見えである。

さらにドリーリアは両手の指を肉裂にあてがうと、ぐいっとばかりに左右に開いた。

「いっ！ ま、まさか」

戸惑うカルシドの前で、赤い媚肉がまるで蝶の羽根でも展翅するかのよう豪快に剥かれてしまったのだ。

(こ、これがクラミシユのおま○こ!?)

目と鼻の先で、婚約者の赤い姫貝が剥き出しである。知識として知っていた陰核が包皮の中からツンと角のように突起し、その下ではぼっかりと膣穴が覗く。

ヌラヌラと濡れ輝く粘膜の奥に目を凝らしていると、尿道口までわかるかのようだ。

鏡に映し出された自らの陰唇にクラミシユは頬を染めながらも魅入り、魔法宝珠越しにはカルシドが魅入る。

トックントックンと溢れる愛液を右手の中指で掬ったドリーリアは軽く口元でペロリと舐めた。

「うふふ、いつもより愛液の分泌がいいようですね。やはり、カルシド殿のお大事に触れたからでしょうか？」

「ち、違うわ。ドリーリアが、こんな意地悪をするからよ」

自らの陰唇をまともに見られないのか、クラミシユの赤い瞳が泳いでいる。

「そうですか？ クラミシユさまのお大事のほうは、早くカルシド殿に貫かれたいとヒクヒクしているようですが」

ドリーリアの視線の先では、細く長い指によって四方に広げられた蜜壺が、まるで魚の口でもあるかのようにパクパクと開閉していた。

「やめてっ！ 今夜のドリーリアは意地悪よっ！」

側近から施される羞恥責めに、顔を真っ赤にしたクラミシユはついに涙目になってしまった。

「申し訳ありません。あたくしも、クラミシユさまの婚約者を見て少し嫉妬してしまったのかもしれないね。では、そろそろイキましようか？」

さすがにやりすぎたと判断したのか、軽く謝罪したドリーリアは、愛液をたっぷり掬って濡れた右手の中指で、陰核を摘んだ。

それを下から上へと搔き上げるようにして、左右に転がし始めた。

「ああ、ああ、ああ……ひい！」

小さな肉芽だというのにクラミシユの変化は劇的だった。身体を大きく仰け反らせるとドリーリアの胸に身を預けて、大口を開けて、涎を垂らす。

「姫さま。あたくしの指がカルシド殿のだったら？ と想像してみてください」

「いや！ あいつなんか、あいつになんかに、絶対に触らせないんだから！ わたし男に



「ば、ばか、そんなにめくるやつがあるか……!? こんな日の光の中で覗かれては……っ！」

「ああ、奥の奥までよく見えるぞ。これがクラミシユのおま○こか。とつても綺麗だ」
鮮紅色の贅肉が透明な粘液にラッピングされ、陽光を受けて輝いている。

包皮に収まったクリトリス。ヒクヒクと物欲しげに収縮する膣穴。目を凝らすとなんとなくわかる尿道口。まさに生殖器だ。

（ほんと、愛液の多い体質だよな）

喉を鳴らしたカルシドは、その花園へと顔を埋めた。

「あ……」

ジュルジュルジュル……。

わざと卑猥な音を立てて啜り飲んだ。

口内に酸っぱくてしょっぱい、それでいて少し苦い牝の蜜の味が広がる。

「バカ、そんな下品な音を立てるな……ああ」

羞恥に悶える女を押さえつけ、カルシドはピチャピチャピチャと、ぬめる粘膜の隅々まで舐め回す。

膣前庭や尿道口を、さらに膣穴にも舌を入れて、処女膜まで舐めた。

「はあ、ああ！」

やがて触れてもない陰核の包皮が剥けて、中身が角のように飛び出してきた。

女性器は顔と同じで、同じ作りでありながら女性ごとに結構個性があるのだが、クラミシユの女性器は、ティファーンの女性器とそっくりだ、と思うのは、母娘と知っているがゆえの先入観であろうか。

（特に、この角みたいニョキッと出るクリトリスの形は、ティファーンさまとそっくりなんだよなあ）

そこでカルシドは、その赤い宝石のような陰核を口に含んで舌で転がす。

「ひいあああ!!!」

牝龍の逆鱗。クラミシユは陰核が本当に弱い女のようなのである。気をよくしたカルシドは舌を高速で回転させた。

「ダメ、イク、イッチャウ！ イクウウウウ!!!」

ヴィーヴルの気高き牝龍は、天に向かって一吠えして崩れ落ちた。

「どうだ。男も悪くないだろう」

陰唇から口を離し、口の周りを手の甲で拭ったカルシドはすでに完全復活している逸物を構えた。それを見て氣息奄々としていたクラミシユはぎよつと目を瞠る。

「貴様、本気でこんなところで最後までするつもりなのか？」

「ああ。もう我慢できそうにない。それに敵陣を見下ろしながらする初エッチというのは、なかなか爽快で、ぼくたちにふさわしいと思わないか？」

「もういい。貴様のスケベさには勝てん。好きにするといい……」

男の熱意に負けたクラミシユはやけっぱちといったようすで応じた。そこで遠慮なく逸物の突端を、濡れそぼつ肉穴に添える。

(ああ、やっとクラミシユとできるのか)

男嫌いを公言してはばからなかった女を、ついにここまで持つてきたのだ。いろいろと感慨深いものがある。

「さて、入れるぞ」

まずは肉棒に右手を添えて、ぐいっと腰を進める。肉穴は丸く広がり、亀頭部を呑み込んで。

「ひい！」

悲鳴を上げたクラミシユが慌てて待ったをかける。

「ちよ、ちよっと待て！ い、痛いぞっ！ ものすごく!？」

その目元に涙が浮かんでいる。あのクラミシユが泣いているということはそうとうに痛いのだろう。

「うん、初めてのときはそういうものらしい。これから徐々に慣れさせるから、いまは我慢してくれ」

こればかりはどうにもならない。逃げようとする女の尻を両手でがっちり押さえて、逸物を強引に押し込む。

ブチッ！

鋼鉄の処女姫の処女膜は、さすがに硬い気がしたが、それを力尽くでぶち抜く。

「ひいひい!!!」

クラミシユはたまらず悲鳴を上げるが、カルシドは容赦なく押し進んだ。

ザラザラザラ……。

まるで龍の鱗のような贅肉が行く手を遮ったが、その狭い隧道を強引に押し開き、根元まで押し込むことに成功した。

「全部入ったぞ。クラミシユ大丈夫か？」

「だ、大丈夫じゃない……。無茶苦茶痛い。男は初めから気持ちよくて、バンバンやるくせに、女だけ痛いのは不公平だ」

気の強い女が泣いている。申し訳ないと思うと同時に、嗜虐心も刺激される表情だ。

（クラミシユの泣き顔なんて初めて見るな。……これからは快感でたっぷり泣かせたいところだが）

しかし、焦りは禁物であろう。カルシドは自粛した。

「このまましばらくじっとしているから、その間に慣れてくれ」

その宣言通り、カルシドは押し込んだまま止まった。

（これがクラミシユのおま○こか……きついな。まさに性格通り）

破瓜のときの女は特にきついものだ。その後、やられるほどに女の身体は男に馴染んでいくものであることを、カルシドはドリーリアやルキアナの身体で学習していた。

その間、両手を前に回して、両の乳房を弄ぶ。

「はあ……はあ……はあ……」

一方のクラミシユは、痛みに耐えるためか、犬のように大きく口を開て、深呼吸をしながら耐えている。

カルシドは天を仰いだ。快晴が気持ちいい。

物見櫓の上にいると、まるで空の上にもいるかのような気分だ。

そうやって待っているうちに、当初はぎゅっと痛いほどに絞めつけていた膣圧も、だいぶ緩やかなものとなってきた。

「そろそろよさそうだな。動くぞ」

「まだ、まだダメだ……!？」

「悪い。ぼくのほうが我慢できなくなってきた。クラミシユのおま○こ気持ちよすぎる」
獣欲を抑えきれなくなったカルシドは、クラミシユの身を気遣いながら慎重に、それ
いて大胆に肉棒を引いた。

（くっ、なんという、ザラザラの襞だ）

龍の鱗のような硬く抵抗のある肉襞が、肉棒に絡みついてくる。

早漏気味の男にとって、この凄まじい襞肉の中を動くことは自殺行為に等しい。

しかし、男嫌いの女に、男のよさを教えてやるんだ、という意地がカルシドを突き動かさずにはいられなかった。

奥函をくいしばって、突貫する。

「あ、ああ……奥にまで、どすん、ドスンって、はあ」

龍の鱗のようにザラザラした肉壁の中を、肉棒は出入りする。

（くっ、なんだ。このおま○こは、ざらざらすぎるだろ。こんな中を動いていたら、すぐに出る。いや、ここですぐに出してみろ。生涯、クラミシユにパカにされるぞ。頑張れ、ぼく）

自らを叱咤激励したカルシドは腰を動かしながら、少しでも気を紛らわそうと視線を上げた。

櫓の上は、三百六十度の大パノラマである。

空を飛翔しながら、牝龍でも犯しているかのようななんともいえない爽快感だ。

あつという間に出そうだが、少しでも我慢しなくてはならない、という状況なのに腰の動きが自然と早くなってしまった。

パンッ！ パンッ！ パンッ！

男の腰と女の尻がぶつかりあい、景気のいい音が鳴る。

「あつ、あつ、あつ、奥に当たる。お腹の中がひっくりかえる。あつ、そんなにかき回したらダメええええ!!!」

女同士の戯れでは絶対に味わえない力感に、クラミシユの喘ぎ声に少しづつあまやかな色が混じってきた気がする。

肉棒が出入りするたびに、頑ななクラミシユの理性の鎧が少しずつ剥げ、牝としての生身が覗いてきている気がするの、男の傲慢というものだろうか。

「あ、あひい、ひいん……わたしが……こんな……男に……、一方的に、ああ、やられて……あがつ」

カルシドの努力の甲斐があつて、息も絶え絶えのクラミシユもだいぶでき上がった感じだ。

木製の柵に捕まりながら、お尻をピクピク痙攣させている。

(でも、もう限界……出る)

射精欲求が耐えがたいほどに高まっている。しかし、意地でもクラミシユより先にイクのはイヤだと感じたカルシドは、龍の逆鱗に触れることにした。すなわち右手を下腹部に回し、クリトリスを捕らえる。

「ひいひいひいひい!!」

ここにきて女の急所を摘まれたクラミシユは、一気に快感の階段を突きぬけたようだ。

電流でも流されたかのように、お尻から背中、肩にかけてがビクビクと震える。

膣洞もキュンキュンと絞めてきた。

(よし、いった)

負けず嫌いな婚約者を先に果てさせたことに満足したカルシドは、肉棒を最深部にまで叩き込みながら、欲望を解放させる。



「クラミシユ、いくぞあああ！」

雄叫びと同時に、睾丸から肉棒内を熱流が一気に駆け抜ける。

牡の変化に、牝は目を剥く。

「えっ！ あ、あああ……!!!」

どひゅ、どひゅゆゆゆゆゆ!!!

子宮口にぶち当たった熱い飛沫が、たちまちのうちに膣洞いっぱいに溢れ返る。

「ひああああああ!!!」

初めての衝撃に、牝龍は我を忘れて悶絶している。

「ふう……」

心行くまでたっぷりと注ぎ込んだカルシドは、一つ溜息をつくくと、小さくなった逸物を引き抜いた。

チュポッ。

萎んだ逸物が抜けると、膣穴はすぐに閉じた。

木柵に捕まるクラミシユのお尻から下半身にかけてがプルプルと震える。

「あ、出ちゃう……」

クラミシユの絶望の声とともに、膣穴が再び開いた。

プシャッ！

膣内に溜まった精液が、逆流して噴出したのだ。

下半身を汚したクラミシユは腰が抜けたのか、そのままヘナヘナとしゃがみ込む。

あの男勝りの女が、男にやられちゃったのだ、ということとを全身で知らしめる痴態に、カルシドはしばし見惚れたが、やがてタオルでその股間を拭ってやった。

「す、すまぬ……」

顔を真っ赤にしたクラミシユは小さな声で謝罪した。彼女が謝罪するというのも珍しいことだ。カルシドはいま出したばかりの逸物がピクッと震えるのを自覚した。

「どういたしまして。それより汗もかいたことだし、こんなところにいつまでもいては風邪をひく。そろそろ降りよう」

「ああ……」

カルシドの提案に頷いたクラミシユだが、いっこうに身支度を整えようとしなない。

「どうした？」

「貴様のせいで腰が抜けた……」

顔を真っ赤にして涙目になっているクラミシユの主張に、カルシドは笑ってしまった。

「仕方ない。背負って行ってやるよ」

「ま、待て、貴様、わたしを晒し者にするつもりか」

暴れるクラミシユを背中に担いで、カルシドは物見櫓を降りていく。

「別に女が恋人に背負われることなど珍しくあるまい」

「わ、わたしは、男嫌いの高潔な女で通っているんだぞ」

ぷるんつと柔らかな乳房がまろび出る。

大きくて見るからに柔らかそうな乳房。まさに熟れきった果実。齧りつけば甘い果汁が溢れるようにしか見えない。あまりにも美味しそうな美肉だった。

「あ、さすがに若い娘たちの前で肌を晒すのは勇気がいるわね♪」

三人の若い娘と若い男の視線を一身に浴びたティファア又は恥ずかしそうに、自らの身体を手で隠した。

「そ、そんな……美しいです」

「ありがとう♪」

娘の称賛の声に、ティファア又は嬉しそうに頷く。

実際のところ、若い娘に負けないという自負があればこそ、真っ先に裸身を晒せるのだろう。

膝立ちになった艶母は自らの乳房を持ち上げると、乳首を軽く含んだ。

「さあ、婚殿の大好きなことやってあげるわ。こちらにいらつしゃい」

乳房で招かれたカルシドは、蜜に導かれる蜂のように匂いたつ大輪の花へとふらふらと近づいた。

「うふふ、元気なおちんちんですこと♪」

優雅と微笑んだ貴婦人は、両手で持つ乳房の狭間へと、逸物を押し包んだ。

白い綿菓子のようにふわふわとした温かい乳肉の間にて、モミモミモミと揉み込まれる。

「……」

爆乳妻によるパイズリ奉仕の前に、三人の若い妻は圧倒されて見守ってしまう。そんな中、ティファアヌは感慨深げに呟く。

「このおっぱいでクラミシユを育てただけど、カルシドくんを育てたのもこのおっぱいなよね」

「カルシドを育てた？」

「そうよ。カルシドくんを男として育てたのはこのおっぱいよ。だから、あなたを抱いたとき、すっごい上手だったでしょ♪」

娘婿の童貞を食ったことを隠さないどころか、堂々と誇ってしまった母を前に、さすがのクラミシユも対応に困るようだ。

「それからね、クラミシユ。実はまえまえから母として、女として、一つアドバイスしたいことがあったの」

「はい。なんなりと」

娘婿にして、新しい夫にパイズリしながらティファアヌは言いづらそうにボソリと呟いた。

「その……マグロはよくないと思うのよ」

「マ、マグロ!？」

意味は通じなかったようだが、なにか酷いことを言われたという自覚はあるらしくクラ

ミシユは目が点になる。

そんな娘に、母親は説明した。

「男の前で股開いていれば、気持ちよくしてもらえらると思つてゐる女のことよ」

「わ、わたしだつて、その……く、口で奉仕してあげております」

血相を変える娘を、パイズリ奉仕中の母親はふつと鼻で笑つた。

「その程度でしょ。あなたこうやつてご奉仕をしたことはあつて？」

「い、いえ……。そ、そのような技があることを初めて知りました」

素直に認めた娘に、母親は得々と説明した。

「古今、正室の座に胡坐をかいてゐる女なんて、プライドが高いだけで抱いても面白くないのよ。まして、主君の娘なんてね。一緒にいても氣疲れするだけ。いづれ婿殿に飽きられて寢屋に呼ばれなくなるんじゃないかと思つて、わらわはそれが心配で心配で」

「よ、余計なお世話です!？」

クラミシユは目を剥いて母親に食つてかかる。しかし、ティファアヌは恐れ入らないどころか、さらに挑発する。

「側室というのはすごいものよ。愛する殿方に楽しんでもらうために、そして、正室にだけは負けないために、ほんと涙ぐましい努力しちゃうんだから」

側室だった女性が言うだけに説得力がある。

畏怖されている娘を横目に、ティファアヌは、正統派美女のルキアナに目を向けた。

「たとえば、彼女なんか、婿殿のためならたとえ火の中水の中、命だって捨てられるって霧囲気よね」

「……」

まさにその通りである。ルキアナは、カルシドへの愛のためなら死ぬるといふ霧囲気は、クラミシユにも伝わっている。

言葉もない娘を横目に、ティファアヌは新しい主人の副官兼側室に質問した。

「あなた、婿殿に裸に剥かれて、首環をつけられて、お散歩に行こうと言われたらどうする？」

そのとんでもない質問に一同は呆れたが、ルキアナの返答にさらに衝撃が走った。

「お、お伴します……」

「っ!？」

頬を染め、視線を逸らしながらも、迷いのない返答である。呆れて声もないクラミシユに、ティファアヌはパイズリしながら器用に肩をすくめてみせた。

「どお、側室というのは、こういう生き物よ。まさに男の玩具」

「わ、わたしにもそれをしろと……?」

目を剥いて呆然としているクラミシユを、ティファアヌはたしなめる。

「そこまでしろとは言わないわよ。でも、側室という存在を知って、それに負けないように振る舞わないとね」

「は、はい……心得ておきます」

どうやら男女間の愛欲には、自分には計り知れない深淵があるのだ、ということに漠然と気づいたのだろう。クラミシユの頬が引きつっている。

「そう身構えなくてもいいわよ。側室たちを適材適所に配することが正室の仕事。彼女たちがなにをやらかすかを知っておけばいいわ。セックスのテクニクについてはわらわが、いろいろと教えてあげられると思うわよ」

「あ、ありがとうございます」

クラミシユはいまさらながら母親に尊敬の眼差しを向けている。

「うふふ、素直ね。なら、あなたもこれ、やってみなさい」

「は、はい……」

母親に促されたクラミシユは、慌てて花嫁衣装の胸元をはだける。そして、促されるままに母親と並んで乳房を持ち上げた。

柔らかくて甘そうな母親の乳房に比べると、娘のほうは張りがあつて若々しい果実だ。かぶりつけば酸味がたつぷり効いていそうだ。

「こ、こうでしょうか？」

母親に操られるがままに娘は、自らの乳房を逸物に押しつけてきた。

仁王立ちするカルシドから見下ろして、右からティファーンの乳房、左からクラミシユの乳房が逸物を包み込んでいる。

「あ、熱い……」

「この熱気に焙られて女は蕩けますわよ」

辛そうに眉を顰めるクラミシユを、ティファーンがたしなめる。

「では、婿殿に奉仕しますわよ」

「りよ、了解です」

母親と娘が、自らの乳房を上下させる。

「娘のために婿殿に女の抱き方を教えて、今度は娘が婿殿に飽きられないように奉仕の仕方方を教える。ああ、わらわつたらなんて娘に甘い母親なのかしら♪」

自己陶醉しているティファーンと、表情の硬いクラミシユが共同で乳房を擦りあわせる。互いの乳首が擦りあわさり、ぷっくりと膨らんだ。

「あ、乳首が擦れて、はあ……気持ちいい……♪」

クラミシユは恍惚と溜息をつく。

逸物の熱と、逸物を挟んでいるという性的な興奮もあるだろうが、純粹に大きな乳房を動かすのだ。重労働なのだろう。全身の柔肌からは玉の汗が吹き出している。

（くっ、こんなことされていいのだろうか？）

結婚初夜。母子並んでのパイズリ奉仕を受けながら、カルシドは眩暈めまいがするほどの興奮に誘われた。

その背後では呆然としたルキアナの眩暈めまいが聞こえる。

「母娘であんなことを……上流階級って爛れていきますのね」

変態痴女への道を一直線に転がり落ちていく感のあるルキアナも、さすがに度肝を抜かれてしまったらしい。

普段は聖母のように見える優しい貴婦人と、男嫌いで鳴らした潔癖娘が、このようなことをするとは、一般人には想像のできない世界であろう。

「いや、さすがにここまで爛れた家庭というのは、そうないと思います」
城主母子と個別のレズ相手を務めてきたドリーリアは、肩をすくめた。

そんな側室たちの会話を聞き咎めたのか、ティファアヌが叱責する。

「さあ、あなたたちも参加しなさい。主人を楽しませてこそその側女ですわよ」

ドリーリアとルキアナは顔を見合わせた。そして、頷きあうと慌てて立ち上がり、花嫁衣装をはだけて、仁王立ちするカルシドの左右から抱きついてきた。

「あっ」

男の脇腹から胸にかけて、柔らかい乳房が押しつけられる。

歓喜に震えるカルシドの耳元で、ルキアナが囁く。

「うふふ、わたくしカルシドさまのためになら、悪魔に魂を売ることすら厭わぬ女です。ですから、セックスも誰よりも激しくお尽くしいたしますわ」

「あたくしは、ティファアヌさまとクラミシュさま、そして、カルシドさまの潤滑油となる女だと心得ております。ですからどうか、これからもお好きなようにお使いください」

実家の忠臣と婚家の忠臣。そのミルク色の肌と、コーヒー色の肌をした美女の柔肌がヌメヌメと擦りつけられる。

二人の意図は明白だ。ティファーンヌ、クラミシユ母娘が逸物にパイズリしているのに對抗して、カルシドの身体そのものを逸物に見立てて、全身パイズリをしているのだ。

女たちの肌から玉の汗が浮かび、男の肌に塗りたくられる。

いや、汗だけではない。左右の女は股の間に、男の太腿を挟み、自らの陰部を擦りつけている。

おかげで太腿には愛液が塗りつけられた。

愛液がダラダラと溢れるくらいだ。彼女たちも興奮しているのだろう。耳元で熱い吐息を浴びせられる。

「ああ」

仁王立ちした状態で、四輪の淫花に包まれたカルシドは恍惚の吐息をついた。

まさに桃源郷だ。身も心も蕩ける。

そんな中パイズリしながら舌を伸ばしたクラミシユが、亀頭の裏筋を舐めてきた。ゾクゾクゾク……。

男の性感帯を的確に捕らえられたカルシドが震えると、ティファーンヌが見咎めた。

「クラミシユ、まだそこはダメよ」

「ですが、カルシドはこれをやるとすぐに出しますよ」

叱責された娘は心外そうな顔をする。ティファア又は溜息をついた。

「だからダメなのよ。男はイカさぬように、飽きさせぬようにじっくりと弄ぶのが、女の腕の見せどころなのよ」

「イかせてはダメなんですか？」

「そうよ。ご奉仕にもね。感じさせる技とイカせる技がある。まずは徹底的に感じさせて、もう出したくて仕方がないって男が泣いちゃうくらいにまで焦らしてから出させるのよ」

男を射精させればいいのだ、と思っていたクラミシユには目から鱗うろこの発想であつたららしい。

「なるほど、さすがは母上。勉強になります」

娘から素直に尊敬の目で見られたティファア又は、さすがに照れくさそうである。

「うふふ、大したことではないわよ。でも、娘に尊敬されるのってやっぱり嬉しいものね。わらわの知っていること的一切都を教えたくなる♪」

「ぜひご伝授ください。わたしはカルシドの正室です。正室である以上、誰よりもカルシドを楽しませることのできる女になりたいです」

その殊勝な言動にティファア又は感動する。

「まあ……聞いた、媚殿？」

「はい。感激です」

男嫌いだった女が、自分のためにエッチなことも勉強したいというのだ。まさに男冥利

に尽きる。

「それじゃ、これも花嫁修業の一環よ。ピシバシいくからね」

「はい」

まるで母親が、娘に秘伝の家庭料理でも教え込むかのようになり、セックステクニックが伝授されていく。

熟練した女の性戯が、水を吸い込む砂のように若い娘に吸収されていく。

（あ、イきたい。もう……出そう。出そうなんだけど。出させてくれない！）

人妻ならではの老獪なテクニクに、いきり立つ逸物は生殺しにされる。

ビックンビックンと震える逸物を胸に包んだクラミシユが悲鳴を上げた。

「母上、その……わたし、む、胸が切ないです」

「ぼくも、もうイきたい。イかせてください！」

若夫婦に懇願された母親は、呆れたように溜息をつく。

「まったく若い子つてせっかちね。いいわ。クラミシユ、イかせてあげなさい」

「はい……。カルシド、いま……楽しんでやる……」

母親の許可をもらったクラミシユは、一気に舌の回転速度を上げた。

「あああ」

もはや臨界点に達していた逸物である。カルシドは左右の美女の腰に両腕をかけると、乳肉に包まれている逸物を暴走させた。

ドビュッ！ ドビュッ！ どびゅゆゆゆゆ！

白濁液が奔騰して、クラミシユとティファアーヌの顔から胸にかけて浴びせられる。

「あはっ、すごい量♪ やっぱり戦のあとの男は格別ね」

ティファアーヌは感嘆し、クラミシユは恍惚としている。

心行くまで射精した逸物が力を失うのと比例して、カルシドの足腰も崩れ落ちた。

射精と同時に、魂まで抜けてしまったかのように呆然と座り込む男の前では、精液まみれの母娘の胸元に、ドリーリアとルキアナがむしゃぶりついていた。

「ちよ、ちよつと、キャ！ ドリーリアどうしたの？」

驚くクラミシユを、ティファアーヌが笑いながら教える。

「側室というのはね。正室よりも精液を飲みたくなっちゃう生き物なのよ」

ドリーリアとルキアナは、さながら餓えた犬のように、母子の胸に浴びせられた精液を、貪り食べている。

その光景を見ているだけで、カルシドはたまらなくなってきた。

「今度はぼくがご奉仕させていただきます」

興奮を隠しきれないカルシドは喘ぎながら四つん這いで近づき、クラミシユとティファアーヌを並べて仰向けに押し倒した。

「ドリーリアとルキアナは、そのままお二人のおっぱいを頼む」

さすがに四人を同時に楽しむには、無理がある。とりあえずはこの淫乱母子を責めるこ



とにして、その手伝いを側室の二人に命じた。

「承知」

「カルシドさまの命とあらば……」

その意図をただちに察したドリーリアとルキアナは、精液舐めから、本格的な乳房責めへと移行した。

ドリーリアがティファアーヌの乳房。ルキアナがクラミシユの乳房をそれぞれ両手にとつて揉みしだきつつ、その乳首に吸いつく。

「ひい」

クラミシユも、ティファアーヌもともとレズつけのある女たちである。いまさら同性に触られても嫌悪感はないらしい。

特にドリーリアは、この親娘両方の寝台に侍っていた女だ。その性感帯も把握している。「ああ。気持ちいい、やっぱりドリーリアは上手ね」

感嘆しているティファアーヌとドリーリアとは違って、ルキアナとクラミシユの間は少し険悪である。

「ルキアナ。カルシドの正室として、カルシドを愛する気持ちでは負けぬぞ」

「ふっ、そんな形式に拘こだわっているようでは真実の愛は見えませんか」

「くっ、減らず口を!？」

正室の意地を鼻で笑われたクラミシユは激怒するが、快感に悶えながらでは迫力はない。

(この二人、相性悪そうだな。しかしまあ、正室と側室の仲がいい道理はないか……) 端から仲裁を諦めたカルシドは、まずは淫乱母娘の四本の脚をまとめて抱え上げる。

「な、なにを……!?!」

驚くクラミシユの足の裏に頬ずりをし、足の指を舐める。

「き、貴様、変態か! ああ」

驚き止めさせようとするとするクラミシユだが、胸に他の女が乗った状態では動くに動けない。それをいいことにカルシドは、母娘の太腿を撫で回し、内腿のかなり深いところまで撫でさすったが、肝心なところには触れない。

クラミシユの足のほうが細くて長い。ティファアーヌの太腿はむっちりしている。

ティファアーヌの綿菓子のような柔肌に対して、クラミシユは大理石の下に血潮が流れているような肌だった。

「ああ、意地悪♪」

さすがにティファアーヌは、カルシドが自分たちを焦らそうとしていることを察したのだろう。甘く拗ねる。

「さっきの仕返しです。たっぷり焦れ狂ってもらいましょう」

「ああん♪」

同性に乳房を執拗に舐め責められる母娘は切なげに内腿を擦りあわせようとするが、カルシドはそれすらも許さない。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 本体690円(税込)

全国書店で
好評
発売中



織田(希莉香)信長、最大の危機!?
戦国武將の名を持つ美少女達が淫らに大バトル!!

信玄、出陣!!
小説：斐野嘉和 / 挿絵：SAIPACO

参

全国書店で
好評
発売中



吸血姫と狩獵者二人の影が闇を斬る
隔月刊コミックヴァルキリーの人気連載漫画
が特選のノベライズ!!

BLANGEL 輪になりて踊る愚者の夜
小説：夜土郎 / 原作挿絵：渡瀬行人

△

既刊LINEUP
全国書店で好評発売中

- 仙皇学塾戦姫ノブナガツ! ①～②
- 悪者姫なアダム ①～②
- 格闘! 帝部少女探偵団 赤い謀略を撃て!

- 借金の娘クリス ①～②
- プリンセスリバーシ! 交響する美姫と魔姫

- 無敵の姫騎士がDMCに目覚めたようです
- ビルグリムメイデン 深紅の溜り聖女

ビルグリムメイデンII

白装の騎士

小説：狩野景 / 挿絵：ほちん



2010 3月 下旬
発売予定!!

不死者を滅ぼす白刃が舞い踊る!

ちょっぴりマッドな聖女様が学園を舞台に大暴れ!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!
- 期間限定で、文庫お買い上げの方に**オリジナルブックカバー**をプレゼント!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18歳ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!



<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!

